

受講者の主体的な研修を促進する動画コンテンツの作成, 運用の在り方の究明

A study on creation and operation of video content to promote independent
training for school teachers

高 良 祐 治

Yuji KORA

教育総合研究所

(令和4年9月7日受付, 令和4年12月20日受理)

これまで大学教員による動画コンテンツが数多く作成され, 様々な運用形式で現職教員の研修に活用されてきた。そこには, 理論面に裏付けされたより専門的な内容を提供することで, 日々の教育実践を支援する役割があるものの, 多くの場合一方的で受動的な研修になるという課題があった。そこで, 研修受講者が主体的に研修に取り組むことができる動画コンテンツの作成過程やその運用の在り方について究明することを目的とした。そのために, 研修実施者と大学教員の両方で動画の目的や構成の共通理解を図った上での動画作成, ICT 機器を活用した双方向性のある研修プログラムの開発を行った。その結果, 受講者及び研修担当から研修への主体性や理解において高い評価が得られ, 他の研修や他教科でも効果的な活用ができる可能性を示すことができた。

1. はじめに

教育基本法(平成18年法律第25号)第9条において「法律に定める学校の教員は, 自己の崇高な使命を深く自覚し, 絶えず研究と修養に励み, その職責の遂行に努めなければならない」とされるとともに, 教育公務員特例法第21条においても「教育公務員は, その職責を遂行するために, 絶えず研究と修養に努めなければならない」とされるなど, 教師はそもそも学び続ける存在であることが強く期待されている。

また, 現在(令和3年11月)審議のまとめが作成中の中央教育審議会「『令和の日本型学校教育』を担う新たな教師の学びの姿の実現に向けて」の中でも, 実現すべき教師の姿について「教師が技術の発達や新たなニーズなど学校教育を取り巻く環境の変化を前向きに受け止め, 教職生涯を通じて探究心を持ちつつ自律的かつ継続的に新しい知識・技能を学び続け, 子供一人一人の学びを最大限に引き出す教師としての役割を果たして

いる。その際, 子供の主体的な学びを支援する伴走者としての能力も備えている。」と言及されており, 学び続けることの重要性が特に強調されている。

一方, この審議のまとめ(案)では, 「教員免許更新制を発展的に解消することを文部科学省において検討することが適当であると考え。」とも述べているが, 本制度の中心的役割を担ってきた大学に対しては, 「『新たな教師の学びの姿』の中にあっても, 中核的な役割を占めることが期待されるものである。」としている。さらに, 「アカデミックなバックグラウンドを有する大学と現場の状況を知悉している教育委員会が, 教師の資質能力の向上という共通の目標に向け, 真摯に協議を重ね, お互いの得意な分野を生かしながら, 教師に必要な学びの機会を提供していく」ことの必要性を強調している。

今回の審議のテーマである「新たな教師の学びの姿」については, 先に述べた「学び続ける教

師」とともに、「教師の継続的な学びを支える主体的な姿勢」も期待されており、そのためにも教師の探究心や学ぶ意欲を刺激する研修内容の充実が求められているといえる。また、「質の高い有意義な学習コンテンツ」が提供される必要性にも言及しており、「学習コンテンツは理論的なものと実践的なものがバランスよく含まれるとともに、いわゆるハウツーを伝えるものに留まらない、本質まで遡るような気づきを提供するようなものも含まれることが期待される。」と述べられ、ここにも教員養成大学としての役割を発揮できる可能性があるといえる。

以上のことを踏まえ、本研究では、福岡県教育委員会の研修機関である福岡県教育センターと連携し、研修受講者が主体的に研修に取り組むことができる動画コンテンツの作成、さらに、その運用の在り方について究明する。

2. 研究主題の説明

(1) 受講者の主体的な研修

受講者の主体的な研修とは、教師が自身のキャリアステージに応じて求められる資質・能力を自覚し、自律的に学び続けようとするものである。

令和3年1月の中央教育審議会答申「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」では、Society5.0時代における教師及び教職員組織の在り方について、「教師が、時代の変化に対応して求められる資質・能力を身に付けるためには、個々の教師が養成段階に身に付けた知識・技能だけで教職生涯を過ごすのではなく、求められる知識・技能が変わっていくことを意識して、継続的に新しい知識・技能を学び続けていくことが必要である。」と言及している。この新しい知識・技能を身に付けることができるよう平成21年から行われてきた教員免許更新制は、一定の成果は上げているものの、教員免許の失効を防ぐためや、職務上の義務として「仕方なく」受講している面もあり、若年教員研修や中堅教諭等資質向上研修等においても同様の理由から、十分に主体的とはいえない状況が一部の受講者において見受けられる。

このことから、教員のキャリアステージや時代の変化に応じ、教員のニーズも踏まえた研修となるよう研修そのものの在り方や手法も見直す転換を図り、教員の学ぶ意欲を喚起する必要がある。

(2) 受講者の主体的な研修を促進する動画コンテンツの作成、運用の在り方

受講者の主体的な研修を促進する動画コンテンツの作成とは、大学教員による小中学校教員のための研修動画について、受講者の実態や研修実施者のニーズをもとに計画、撮影、編集等に関するマネジメントを行うことである。また、その運用の在り方とは、研修動画を一方的に視聴させるだけでなく、ICT機器も活用しながら自己の考えを表出したり、他の研修参加者と協議を行ったりする等、受講者がより主体的に研修に臨むことができるように研修プログラムの工夫を行うことである。

これまで本学では、福岡県教育委員会が実施する各種研修について、理論面や実践面から支援することで、現職教員の資質能力向上に資するため、大学教員による動画コンテンツの作成や提供を行ってきた。さらに井上（2020）は、動画コンテンツを活用した3つの研修モデルを開発・整理し、福岡県教育委員会と連携、運用してきた。

表1 動画コンテンツを活用したこれまでの研修モデル

モデルⅠ	反転学習の考えを取り入れ研修内容の充実と研修時間の短縮を目指す研修モデル	事前に研修動画を視聴し、レポートを各自が作成した上で、講義を受けることで、主体性や研修時間のゆとりが期待できる。
モデルⅡ	オンラインでの研修を代替研修と見なす研修の効率化モデル	各々の受講者がオンデマンド配信された研修動画を視聴し、後日、受講レポートを提出することで、繰り返し研修内容を学習することができる。
モデルⅢ	研修担当者(指導主事)の講義内容の支援のためのコンテンツ作成及び提供モデル	動画を視聴して指導主事の説明を聞いたり、その逆を行ったりすることで、研修権者支援とともに、研修をより充実させることができる。

このような運用の工夫により、受講者からは、モデルⅠ、Ⅱについて研修時間や場所、研修ペースの自由度、モデルⅢについて研修理解度等において効果的であるとの評価がある一方、ICT環境の整備状況の差や、講師への質問や他受講者と

の意見交流等ができない研修の孤立化への課題も挙げられている。また、研修実施者である県教育センターからは、研修の効率化や能動的な研修への評価とともに、受講者の実態に応じた研修内容へのさらなる改善や理解度の把握の困難さ等について課題が挙げられている。

このことから、大学が教員研修において果たす役割を考え、遂行していく際に留意すべきこととして、次の2点が考えられる。

① 研修実施者との十分な協議

各研修には、研修対象者の立場や経験や目標、研修実施者の目的や意図や手立てがあり、その上で大学の研修への協力に対する要望がある。動画コンテンツを作成する前に十分な情報交換等を行い、研修実施者と大学が研修における役割や研修動画の作成方針や内容について共通理解を図る必要がある。

② 受講者の主体性を引き出す動画コンテンツ運用の工夫

大学の教員が研修会場に赴き、直接講義を行うことは、多岐にわたる研修体系や大学教員の本務から見ていつもできることではない。そこで、事前に作成された動画コンテンツを活用していくが、一方通行の知識伝達型にならないよう、双方向性、即応性、他受講者との交流を取

り入れ、受講者がより主体的になる運用の在り方を検討する必要がある。

そこで、本研究において、大学が教員研修に活用する動画コンテンツの作成過程、及び受講者の主体性を引き出すための ICT 機器を活用した効果的な研修プログラムの開発について検証を行うことは、大学の教育委員会との連携や現職教員支援を推進する上で価値を有すると考える。

3. 研究の構想

(1) 研究の対象

福岡県教育委員会が主催し、福岡県教育センターが主管して実施される基本研修「令和3年度中・義務教育・特別支援学校若年教員研修1年目」の令和3年10月27日（水）に実施される第3回「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業づくり（社会科）」において活用される本学が作成した動画コンテンツについて、その作成過程、活用の在り方を検証する。

なお、本研修の参加者は、令和3年度に福岡県の中学校教諭（社会科）として採用された35名であり、研修担当は、福岡県教育センター教育指導部教科教育班指導主事の手島綾氏、動画作成協力者は、本学社会科教育ユニット教授の豊嶋啓司氏である。

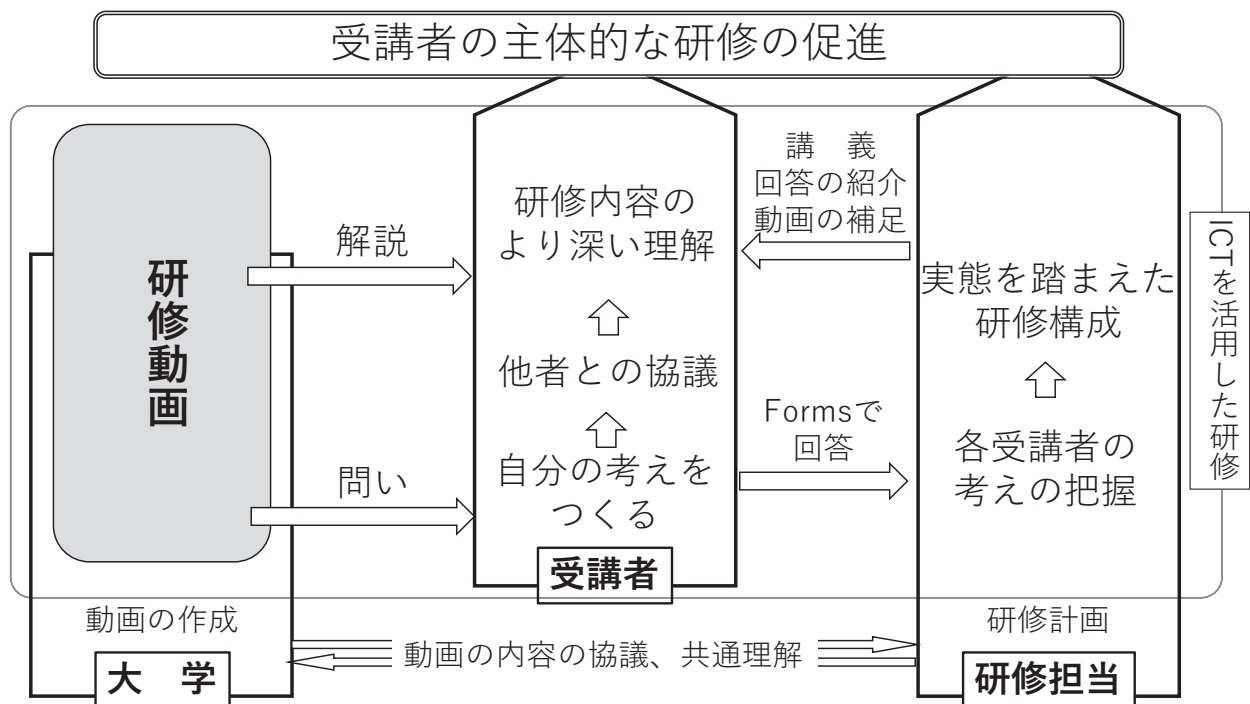


図1 ICT機器を活用した研修の全体構想

(2) 研究の方法

① 研究目的の共有、共通理解

研修受講者が主体的に研修に取り組むことができるよう、研修実施者である県教育センターの意向を確認しながら大学が動画コンテンツを作成すること、さらに、その運用の在り方も一方的なもの（受講者が受動的にならないもの）とするための運用の在り方を究明していくことの共通理解を図る。

② 動画内容の検討、作成

研修担当指導主事と動画を作成する本学教授との3者で、作成する研修動画の活用目的、研修の中での活用場面、研修担当が求める内容と大学が提供できる内容の調整を行うことで、動画の概要を決定し、作成する。

③ 研修の進め方についての協議

動画を活用する中で、受講者が自身の考えを表出したり協議したりしながら研修を深めることができるような研修プログラムの構成について協議を行う。

④ 研修環境の整備、確認

限られた研修時間の中で、すべての受講者が研修動画を視聴したり、研修担当からの働きかけを受けたりして、自身の考えを表出するためには、ICT機器等の活用が有効と考えられるため、ICT環境の確認や準備、運用の調整を図る。

⑤ 研修の実施

当日は、研修動画の中で、複数の問いを受講者に投げかけ、各受講者はその問いに対する自身の考えをGoogle Formsを通して入力する。この入力内容は、即時に研修担当のタブレットに表示されていく。受講者は入力後、受講者同士で交流を行い、研修担当は集約された回答を踏まえ、研修動画による解説や受講者の回答の紹介、補足説明を行う。

また、一連の研修動画の運用の様子を観察、記録する。

⑥ 評価

研修終了後に受講者へのアンケート及び研修担当指導主事へのヒアリング調査を行い、本研究の成果や課題について検証を行う。

4. 研究の実際

(1) 研修担当指導主事との研修の全体像についての協議

5月下旬に、今回の取組について検証を行う「若年教員研修（社会科）」を主管する福岡県教育

センター教育指導部教科教育班の主任指導主事及び研修担当指導主事に本研究について説明、協議を行った。ここで確認したことは、以下の通りである。

① 動画コンテンツの活用イメージの共有

これまで一般的に行われてきた大学教員による講義動画を視聴するだけではなく、動画視聴と自身の考えの表出を組み合わせた双方向性のある活用を行う。

② 作成する動画の内容

研修の趣旨や内容、日程等を考慮するとともに、理論面について講義ができる大学教員の特性をいかすために、いくつかの内容案を例示し、研修担当者は希望する動画のイメージを6月中旬までに大学側に提示する。

③ 研修実施までのスケジュールの確認

教育センターから希望する動画の内容についての要請を受け、大学で動画を作成し、8月末までに教育センターへ提供する。

本年度は、新型コロナウイルス感染症感染拡大によって、集合研修が実施できるかオンライン研修となるか未定の状況であったため、9月に入ってから、研修の進め方を検討する。

④ 調査研究への協力依頼

本研究の成果や課題について検証するために、研修当日を含め、研究過程の記録を採る。また、研修実施後に研修担当へのヒアリングや受講者へのアンケートを行う。

⑤ 成果や課題の共有

研修実施後、本研究のまとめを教育センター側へ提供することと併せて、次年度以降も動画コンテンツを活用した研修支援の改善を行いながら、他の研修へ広めていくことを検討することを確認した。

(2) 動画の内容についての協議

教育センターとの協議を受け、動画を作成する大学教員への趣旨説明や内容についての協議を行った。

教育センターからは、4月に採用された受講生が、これまで社会科の授業を行ってきて、改めて社会科専門の教師として社会科とどのように向き合っていけばいいのか考える時期だと考えるので、学習指導要領に立ち返り、社会科の基本に関する講義動画をお願いしたいと依頼があった。そこで、動画の中で大学教員から3つ程度の問いを受講者に投げかけ、その問いに対して各受講者が考えたり、受講者同士で協議を行ったりした上

で、講義を行うような動画構成にすることを確認した。

さらに、7月下旬には、教育センター研修担当指導主事と大学教員が、研修全体の構成や動画の内容について協議や共通理解をする場を設定した上で、研修動画の作成を行った。

(3) 動画を活用した研修の進め方についての協議、事前準備

9月末で新型コロナウイルス感染症による緊急事態宣言が解除され、集合研修が可能との見通しが立ったため、具体的な研修運営について打合せを行った。

① 研修環境整備

受講者が自身の考えを入力したり発信したりし、研修担当がその考えを集約したりする際に、ICT機器を活用するため、「産業・情報教育棟」の第18研修室を全体研修会場とし、会場後方に15台のノートPCを配置した。さらに残り20名が使用するPCについては、第1パソコン実習室へ移動して入力することとした。

② 研修の進め方

受講者の主体的な研修とするために、次の手順で研修をすすめた。

(ア) 4月に赴任してから今までの自身の社会科の授業における課題を受講者同士で交流することで、研修への課題意識を持たせた上で、自身の考えをつくり入力する。

(イ) 入力した内容について、受講者同士の交流を行う。

(ウ) 動画による講義を視聴する。

(エ) 研修担当による補足・講義を行う。その際研修担当は、受講者が入力した考えをタブレットで集約し、受講者同士が交流している間に、受講者の考え方の実態を把握した上で、講義内容に活かすこととした。

以上のような手順を踏むことで、受講者の課題意識や理解状況に応じた研修となることが考えられる。

(4) 研修の実際

① 大学教員からの3つの問い

研修のはじめに、研修担当から本学大学教員の研修動画を活用した研修となること、自身の考えをPCで入力する場面があることを伝えた上で、動画のはじめの部分（大学教員から3つの問いを提示）を視聴させた。問いは次の3つ

である。

(ア)「社会科」とは？

社会科が何を目的とする教科であるか、改めて考えることで、生徒にどのような力を身に付けさせることが求められているかを確認する。

(イ)「社会科がわかる」とは？

記憶の反復を試すテストが依然多い状況の中で、知るだけでなく、複数の事柄の関係を説明できる状態にまで学びを深め、社会に生きる知識とする必要があることに気づかせる。

(ウ)「社会科の授業」をどうつくるか？

一方的な講義型の授業ではなく、知ったことを使って「なぜ」の問いに答えることができ、価値判断を伴った意思決定へとつなげていくような授業が求められていることに気づかせる。

② 自己の考えをつくる

提示された3つの問いについて各受講者は考えをつくり、割り当てられたPCで入力を行った。その際、Google Formsに入力し送信したあとは、自身が入力した内容が見られなくなるため、簡単にメモをとっておくよう指示した。

入力された各受講者のデータは、研修担当のタブレットに即時集約されていくため、入力状況や各受講者の考え方をすぐに把握することができた。

③ 受講者同士の協議

入力後は、問いごとに、入力した内容についての受講者同士の交流を行い、その後動画による講義、研修担当による補足・講義を行った。

受講者同志の交流については、3～4人程度でグループ交流を予定していたが、新型コロナウイルス感染症感染防止のため、アクリル板を設置して2人1組での交流とし、その後交流した内容について発表を行うことで、全体で共有した。

受講者にとっては、同じ初任者という立場の他の受講者がどのような考え方をしているのか知ることで、参考になるとともに、刺激を受けたり安心感を持ったりすることができた。

④ 動画の視聴

受講者同士の交流の後、各問いに対する大学教員の解説動画を視聴した。

日頃自身が行っている社会科の授業について、主に理論面から講義を受けることで、改めて社会科を学ぶ意味や授業実践の意味づけを行うことができたと考える。

⑤ 研修担当の講義

動画視聴の後、実践事例等を加えながらプレゼンテーションを用いて、動画の補足説明や講義を行った。

その際には、受講者が入力した各問いに対する考えを紹介したり意味づけたりしながら、講義を行った。



写真 受講者の考えを紹介しながら講義を行う

5. 結果と考察

研修終了後に、受講者へのアンケート及び研修担当への聞き取りを行うことで、①動画コンテンツの作成過程や運用の在り方について②受講者の主体的な研修の実現について検証を行った。

(1) 受講者の反応から

＜アンケート結果＞（一部抜粋）

Q：大学教員からの問いについて、自身の考えを記入することができたか。

☐ 十分に記入できた

・ 教員になってからの半年の中で、常につきまとう考えであったから。

☐ ある程度記入できた

・ 日頃から意識して考えているわけではなかったため、勉強が足りておらず、満足いく回答ができなかったから。

☐ あまり記入できなかった

・ 問われたことについては、考えたことがなかったのが難しかった。

Google Forms を活用して PC で入力を行う形式であったが、35 名の受講者全員が設定した時間内に入力を終えることができた。受講者によって問いを身近な問題として積極的に入力できた感想やや戸惑いながら入力した感想が見られた

が、全体の感想に「自分の社会科に対する捉えを言語化する機会があったことは、自己を振り返る意味でとても意義のある時間であった。」といった記述が見られ、有効であったと考える。

Q：大学の教員による動画の解説は、これからの授業実践に役立つか。

☐ 非常に役に立つ

・ 大学で学んできたことを改めて見つめ直すことができたから。

・ 社会科という教科の本質や社会科を教えていくことの理由などこれまで考えたことがなかったことを考える機会となったから。

・ 大学の頃に聞いたことを、実際に授業をするようになって、改めて授業に当てはめながら聞くことができたから。

☐ まあまあ役に立つ

・ 今の自分には、内容や表現がやや難しいと感じたから。

実際に授業実践を行う立場となって、日々の自分自身や生徒の姿を振り返りながら PC に入力した上で、大学教員の話聞くことは、理論面から改めて深く理解することや、今後の研鑽の必要性に気づかせることにつながっており、社会科教員としての主体性に効果的な影響を与えることができたと考える。

このことは、初任者として約半年が経過した若年教員が対象であることや研修内容の全体像、その中で大学教員の講義に求められる内容について、研修の実施者と大学で共通理解を図りながら作成した動画が、受講者の実態に適したコンテンツとなり、研修を充実させることにつながったといえる。

Q：「自身の考えを PC 入力→交流→動画による大学教員講義→指導主事による補足講義」という研修方法は効果的だと思うか。

☐ 非常に思う

・ 従来の一方的なオンライン講義より研修に向かいやすいから。

・ 自分の考えをいったん整理した上で講義を聴くことができるから。

・ 大学の先生からの理論面と指導主事からの実践面の講義で、とても学びやすくなりやすかったから。

☐ まあまあ思う

・ 他の受講者が書いた内容をもっと見たかった。

研修体制面から見ても、受講者へのアンケート結果から主体的な研修への参加を促進することができた。これは、一方的なオンライン研修やオンデマンド研修、研修の中での一方的な動画視聴と異なり、次のような活動を通して思考の活性化が図られたからだと考える。

- ・ 大学教員からの問いの投げかけに対して、これまでの自身の授業を振り返りながら考える
- ・ つくった考えをPCに入力することで文章化する
- ・ 交流を通して自身の考えと比較したり参考にしたりする
- ・ 自身の考えを踏まえて大学教員の動画を視聴したり研修担当の講義を受けたりすることで、考えの付加修正を行う。

一方で、研修担当とはGoogle Formsで集約した受講者の入力内容を紹介しながら講義を行うよう打合せを行っていたが、研修時間の関係上、少数しか紹介できなかった。グループ協議の進め方やPC上で一覧として提示する等、入力内容をさらに活かす工夫の余地があるといえる。

(2) 研修担当への聞き取りから

<動画作成の過程について>

これまで大学等から提供された講義動画は、各研修の活動や内容を前提としてつくられたものではないことが多かったのも、たとえ関連性があったとしても、研修担当が行う講義と分離して視聴させる形式が多かったと思う。

今回は、はじめに研修の対象者や目的と内容を大学側と共通理解した上で動画を作成したことが研修を一つのものとして成り立たせる上で非常に有意義であった。

研修を企画、運営する福岡県教育センターのニーズを踏まえた上で研修動画を作成したことは、研修担当としても研修の計画を立てる段階からどのように活用すべきか見通しを持つことができ、研修効果を高めることにつながったと考える。一方で大学教員と研修担当の打合せを何度も設定することは難しいため、細かな修正等はいりづらいという課題も明らかになった。

<完成した動画の内容について>

専門的な言葉がやや多いと思ったが、受講者のアンケートを見ると、これくらい専門的でないと受講者も満足しないと思った。受講者には、大学を出たばかりの初任者もいれば講師経

験が長い初任者もいる。それぞれ状況も異なるし、受講者アンケートで「日々行っている授業にどのような意味があるのか再確認できた。」といった記述もあったので、ある程度専門的な講義の動画になっていたのは良かったと思っている。

たとえ若年者にとって知らない語句等が出てきていたとしても、今後勉強していかないといけないという認識ができたと思う。また、「なぜ社会科を学ぶのかということを自信を持って子どもたちに伝えることができるようになった。」と受講者が感想に書いていた。日頃の自分と大学の先生の講義をつなげて研修ができたので、自身の授業に直結する学びとなったのではないかと。

大学の教員が現職教員を対象にした研修で講義を行う意味は、日常の授業実践のみでは意識しにくい最新の教育情報や教科理論や学習理論について紹介や解説を行うことで、授業実践力を向上させるところにある。そのため、どうしても専門的な語句等が登場する講義となるが、受講者の今後の研修意欲への刺激となっていることが考えられ、研修担当の補足講義とセットで実施できたことでより効果が高まったと考えられる。

<ICTを活用した研修スタイルについて>

受講者が、まず自分の考えを文字化することで、自分の考えを整理することができたということがよかったと思う。

さらに他の受講者と交流することで、似たような考えや新たな視点を知ることができた。その上で、自分が記述していた考えと比較しながら専門的な大学の先生の講義を聴くことで、自分に足りない部分や今まで気づいていなかったことなどを知ることができた。

そして、授業レベルに具体化して私が話をしたことで、受講者の中で、自分の意識の振り返りから授業の振り返りまでという一連の流れがスムーズにつながっていった。

通常の研修だと指導主事1人からの講義や演習になるが、今回のように大学教員の動画と指導主事の補足講義という形で、2人から講義を受けることで研修成果が高まったと思う。

このことから、日常の自分自身を振り返り、PC入力という形で可視化するところから研修が始まり、他の受講者の考え、大学教員の講義、研修担当による補足講義と、日頃の授業を行う自分

をベースに研修に向かうことができるため、研修動画をICTを活用して運用することは、受講者が研修に対して主体的に取り組むことに効果があったと考える。理論面を中心とした大学教員の講義とそれを実践事例を示しながら具体化した研修担当の講義を共通理解のもと共同で行う体制を実現できたことで、受講者にとってより理解が深まったと考えられる。

6. おわりに

本研究では、教育委員会等が実施する現職教員を対象とした研修において活用する動画コンテンツを大学が作成する際には、研修実施者との間で対象となる研修の目的や内容を共有、共通理解する必要性が明らかになった。また、運用の際には、受講者に課題意識を持たせる問いをはじめに投げかけることや、ICT機器を活用し、受講者自身の考えを整理し、可視化することや、その考えを講義にいかすことが、受講者の主体的な研修を促進することに効果的であることも明らかになった。

しかし、ICT機器の環境整備状況によって運用の在り方に差異が生じることや、受講者が入力した内容を講義や演習において更に活用するための在り方等、検証すべき新たな課題も残されている。今回は、初任者を対象とした若年教員研修の中学校社会科において検証を行ったが、今後、他の基本研修や専門研修、他教科についても本研究の有効性について検証を重ねていきたい。

謝辞

本研究においては、動画コンテンツの内容検討や運用について福岡県教育センター教育指導部教科教育班に、ICT機器の環境整備や準備を産業・情報教育部にご協力いただいた。また、動画コンテンツの構成や撮影、編集に至るまで福岡教育大学社会科教育ユニット教授豊嶋啓司氏にご協力いただいた。ここに謝意を表する。

7. 参考・引用文献

- 中央教育審議会（2021）.「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）.
- 中央教育審議会（2021）.「令和の日本型学校教育」を担う教師の在り方特別部会～「令和の日本型学校教育」を担う新たな教師の学びの姿の実現に向けて 審議まとめ（案）.
- 中央教育審議会（2015）. これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～（答申）.
- 井上和俊（2020）. オンラインによる研修を効果的に活用した中堅教員資質向上研修モデルの開発に関する研究. 福岡教育大学紀要（第4分冊）, 69, 245-259.
- イーディーエル株式会社（2020）. 今すぐ使える！ Google for Education 授業・校務で使える活用のコツと実践ガイド. 技術評論社.
- 當山清実（2019）. 「優秀教員」の職能開発～効果的な現職研修の検討～. ジアース教育新社.
- 山本眞一（2014）. 大学マネジメント論. 放送大学教育振興会.